

平成29年度 コメント大賞受賞作品



芸術学部3年
田中 優菜さん
『「におい」の心理学』

『「におい」の心理学』 足立博著 弘文堂 1995年

これほど素晴らしい本が書架に眠っていたなんて！！と衝撃を受けました。名著との出会いはいつ訪れるか分からないものです。

著者は精神科の医師。においに苦しむ精神科の患者たちと接するうちに「におい」の持つ深遠な力について考えるようになり、その考えと想いをこの本に思慮深く込めています。心理学の本でありながら哲学書でもあり、詩的なエッセイでもあり、読者の記憶や人間性を映し出す鏡でもあります。

「におい」というと嗅覚的なものを思い浮かべがちですが、言葉や人間の本質などあらゆるものにおいがあるのだと著者は語ります。姿を見ただけでその人の性格や自分と気が合いそうかを察することができるのは、その人から匂い立つ本質を感じているからかもしれません。

また、著者が出会った精神科の患者たちのエピソードも非常に興味深いものでした。においを喪失していく社会の中で自分のにおいを求め続ける患者たち。「自分が存在しうるために、確固として不変なものであるために、あのときは溺れるほどの水が欲しかった」という言葉の重みは迫るものがありました。

この本を読み終えてから、においというものに意識的になったと感じています。草木のにおい、風のにおい、おいしいご飯のにおい、友達のにおい。においが心を温かく満たしてくれていることに気づけたのは、この本があったからだと思います。



平成29年度 コメント大賞受賞作品



芸術学部2年
内田 貴志さん
美術展 「吉田博展」

「生誕140年 吉田博展」 久留米市美術館

【会期:2017年2月4日(土)~2017年3月20日(月・祝)】

これほどまでに日本人の美意識を反映した風景画があっただろうか。山頂から見下ろす風景。荘厳な山の姿。彼は山、日本の山を愛していた。彼の類稀なる技術力。同じ福岡県出身としてじつに誇らしい。油彩においてはいうまでもなく。多彩な色彩感覚、そして描写力。どれをとってもいやっただらうところがない。筆に迷いがなく、軽やかにえがかれていることがわかる。また、本展時の目玉と言え、あり得ないほどの多色刷りを重ねたという版画。その回数なんと99回。見事なまでのグラデーションは鮮やかでくすみなく、透き通るように変化してゆく。繊細すぎる彼の色彩感覚は見る者を圧倒し、感嘆させるであろう。何せ戦後GHQのマッカーサーが厚木に降りて一言目に吉田はどこだ?と聞いたくらいだからである。また彼の作品は日本での評価より海外での評価が高い。有名どころで行くとダイアナ妃が私蔵で買い付けたほどである。



平成29年度 コメント大賞受賞作品



国際学部2年

山本 楓さん

『生きること学ぶこと』

『生きること学ぶこと』 広中平祐著 集英社 2011年

この本の中で一番心に残ったのは、needとwantの違いについて述べていた部分です。needは、過去の出来事や評価から編み出された必要性であり、過去との結びつきが強く、wantは自分の内側から発生し、理想も含まれた欲求であり、未来との結びつきが強いということが述べられていました。また、needでやっていることはいつか、なぜやっているかわからなくなるし、何かあっても他の何かのせいにしてしまう。しかしwantでやっていることはそういうことにはならないし、何かあっても自己責任であると述べていたのも印象に残りました。ちょうどこの部分を読んだのは、私が第二外国語で何を選択しようかと悩んでいた時でした。「スペイン語か中国語が実用的だろうか。でもあまり興味がわからない」「イタリアに興味があるからイタリア語にしようか。でも話者が少なく通じる地域も狭い。」など色々考えていて、この本のこの部分を読むまでは、話者の多さ、留学、就職、近年のニーズなどを考慮してスペイン語を選択するつもりでした。しかしこの本を読んでから、スペイン語を選択することはneedを基準に選んでいるのではないかと？wantに従ってイタリア語を選ぶのもありなのではないかと問い始め、結局イタリア語を選択しました。今のところイタリア語の講義はかなり楽しいし、イタリアに行きたいという気持ちはますます強まっているし、こっちを選んで良かったと思っています。

話が逸れましたが、これから色々な選択をしていく中で、今自分がやろうとしていることはneedなのかwantなのかということを中心に考え、そして、できるだけwantに従って行動して行きたいです。それは自分に正直に生きるということでもあり、自分らしくいるために必要なことであると思うからです。先生が書かれた本の推しは是篇文だったか、本の冒頭部分だったか記憶が不明瞭ですが、「これから新しいことを学んでいく新入生のみなさん非読んでもらいたい本です。」と書かれており、この本から学ぶことはこれからの日々の勉強にかなり役立つことなのではないかと直感的に思いました。そして私は直感の通り、これからの勉強、さらには生活にも、大変役立つようなことを学びました。それは「あらゆるものから学ぶ姿勢」です。作者は何かのエピソードがひと段落するたびに、「そして私は〇〇という友人から**ということ学んだのである。」と述べていて、家族、友人、出来事の一つ一つから様々なことを学び取ろうとしている作者の学びへの意識の高さ、感受性の豊かさを感じました。自分が興味を持っている事柄、仲の良い友人からはもちろん、あまり興味のない事柄、まだよく知らない人たち、気が合いそうにない人たちからも、必ず学ぶことがあるということを常に念頭に置いて生活して行こうと思います。

私事ですが、この本を読んでいる最中に祖父が亡くなりました。それをきっかけに私は、死とは何であろうかということをしばらく考えていました。この本にあるように、生きることが学ぶことであるならば、学ばないことは死ぬことなのでしょう。本を読み進めながら時折深く考え、自分なりの答えを出そうと試みましたがよくわかりませんでした。これからはたくさん本を読み、人との関わりを大切に、本からも人からも、一つ一つの出来事からも、できるだけ多くのことを感じ取り、学び、自らの考えを深めていきます。

平成29年度 コメント大賞受賞作品



芸術学部2年
山下 栞さん
映画「怪物はささやく」

映画「怪物はささやく」 パトリック・ネス原作/脚本 J.A.バヨナ監督

誰もが抱える心の闇を美しい色彩と繊細な演技で描き出したダークファンタジー作品だ。

病の母を持つ孤独な少年が、怪物が語る物語を通じて自分の心と向き合うストーリーがあまりに切なく美しい。

怪物が最後に語らせた少年の「真実の物語」は私の心臓までえぐってくるようだった。振り返れば短い人生の中にも未熟ながらに葛藤したことだらけだ。目を背けたくなるような己の正直な感情、それと向き合うことは恐怖を伴うが、全てを受け入れて物事に向き合おうとする心は確実にたくましいものになっている。

影絵のような美しいアニメーションや絵の具のにじみ、鉛筆のこすれる音にも心奪われる。



平成29年度 コメント大賞受賞作品



芸術学部3年
田中 優菜さん
映画「リベリオン」

映画「リベリオン」 カート・ウィマー脚本/監督

感情なんて無ければいいのに」と思ったことはありませんか？

私にはあります。怒りや悲しみでどうしようもなくなった時、感情がすべての苦しみの根源のように感じられます。でも、そこから立ち直らせてくれるのもまた感情で、人生をより鮮やかに感じるために必要なものです。

そんな、人間から切っても切り離せないと思われる感情を、薬によって完全に制御した世界が「リベリオン」の舞台です。

主人公は、感情を持つ人間を排除する特殊捜査官のジョン。ある日、些細なことから薬を投与せず仕事に出た彼は、違反者の女性の言葉や美しい景色に触れたことにより感情を呼び覚まされ、感情を抑制する社会のあり方に疑問を持つようになっていきます。

東洋武術と銃を融合させた架空の戦闘術「ガン・カタ」によるアクションシーンは目を奪われるほどの美しさがあります。日本刀での戦闘も必見です。感情を統制した社会を壊したとしても、本当に幸福な世界は実現できるのでしょうか？問いかけるようなラストシーンは必見です。



平成29年度 コメント大賞受賞作品



芸術学部2年
小川 結さん

映画 「LA・LA・LAND」

映画 「LA・LA・LAND」 デイミアン・チャゼル監督

ミュージカル映画ってどうしてこんなにワクワクするんだろう。
映画の予告を見た瞬間から、そんな気持ちが沸き起こった。

夢を追いかけ必死にもがく男女の物語。昔からいくつも描かれたテーマのストーリー
だと思う。

この映画ではそのストーリーを、鮮やかにリズムカルにロマンチックに、そして楽し
く仕上げられていた。

つらい現実もリアルなすれ違いも、誰もが夢見るきれいな夢も、全てがひとつの映画
として完成されている。

まずは夢を追いかける二人を見てほしい。

誰もが夢を追いかけて一生懸命走りきれぬ訳ではなく、途中で諦めたり妥協してし
まったりしてしまう。

夢を追う、というその行為の苦しさを改めて感じてしまった。

次に恋に落ちた二人を見てほしい。

恋の楽しさと、恋人が自分のことを知りすぎている息苦しさが二人のすれ違いを生み
出していく。

それでもやっぱり恋は美しいと、そう思える映画だ。

そして何よりも歌とダンス。

とにかく楽しい。ミュージカルに慣れない人が見ると「ここで歌うの?!」となるか
もしれないが、慣れてしまうと次にいつ歌いだしてくれるのかソワソワしてくるのだ。

できることなら一緒に踊ってリズムに乗りたくなってしまおう。

切ない歌も楽しい歌も、物語を盛り上げ客の心を引きつける。

完成度の高い映画だった。



平成29年度 コメント大賞受賞作品



芸術学部2年
小倉 佳菜さん
美術展 「ミュシャ展」

「ミュシャ展」 国立新美術館

【会期:2017年3月8日(水)～2017年6月5日(月)】

ミュシャ展は2013年にもジスモンダなどのポスターを主にして展示されていましたが、今回はスラヴ叙事詩の作品がメインに展示されています。スラヴ叙事詩はミュシャが50歳の時から描き始めた作品で会場には高さ6m横幅4mの巨大な作品が20点程とポスターなどが展示されていました。横幅が8mのものもありました。大胆な構図に緻密な描写と本当に油絵の具で描かれているのかと疑ってしまうくらい筆の荒々しいタッチが無く、作品の完成度の高さにも圧倒されました。私はミュシャの描く、植物の葉と女の子の花冠の色合いと表現に魅了されました。好きな作品からはなかなか離れられませんでした。会場内は何度も行き来できるので、これでもかというくらい目に焼き付けられて良かったです。作品撮影可能エリアがあるので行くべきです。画集に載っているのと実物では画集の方が暗く感じて見づらいので実物を見に行くのがお勧めです。

